

=====
◆◇「犯罪からの子どもの安全」メールマガジン vol.25 ◇◆
2010年9月30日号

=====
このメールマガジンでは、(独)科学技術振興機構 社会技術研究開発センター(以下、RISTEX)「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域が領域の活動報告をはじめ、各種イベント案内、国の取組み、問題に取り組む人々の紹介など、犯罪からの子どもの安全に関する様々な情報を毎月一回程度配信しております。

次回から配信を希望されない方、登録情報を変更したい方は、末尾をご参照下さい。

メルマガについてご意見やご感想、こんな情報が知りたい、こんな取り組みを行っているなど、皆様からの情報をお待ちしています！

◆◆ INDEX ◆◆

1. 研究開発領域・プロジェクトの活動紹介
2. 犯罪からの子どもの安全レポート
・研究会「リスク心理学と犯罪からの子どもの安全」
3. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイト更新情報
・国の取組み情報
・イベント情報
・見どころピックアップ！
4. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイトアクセスランキング
今月一番注目されたコンテンツとは・・・
5. 今月のキーワード
今年上半期の違法・有害情報の件数

◆◆◆◆
皆さんこんにちは！

9月に入ってから猛暑日を記録するなど、暑さの勢いがなかなか衰えませんでした。ここ最近は一気に気温が下がり、街も人も、ようやく秋の装いになってきました。

このメルマガも発行から丸2年を迎えることができました。月日を重ねられたのも、読者の皆様のお陰です。心より感謝を申し上げます。

3年目という区切りを迎えるにあたり、文面のプチリニューアルを行うことといたしました。年々増えてきたお伝えしたい情報を、すっきり整理して掲載するため、今まで3つだったINDEXを5つに増やしました。

また、新コーナー「今月のキーワード」も設置。このコーナーでは、今月のニュースなどで気になった数値やワードについて簡単に紹介していきます。

リニューアル号でお届けするレポートの第一弾は、9月3日に開催された
ページ(1)

第2回若手の会連続セミナー「リスク心理学と犯罪からの子どもの安全」 研究会の見聞録です。

前々号のメルマガで第1回のセミナーの様子を掲載した際にも紹介しましたが、若手の会とは、当領域で研究開発を行っている、若手メンバーで構成される有志の会のことです。

今回はその第2回目として、リスク心理学の基礎というタイトルで同志社大学の中谷内一也教授による講演が行われました。参加者の畑倫子さんに当日の様子をご寄稿いただきましたので、ぜひご覧ください。

1. 研究開発領域・プロジェクトの活動紹介

今月も各プロジェクトでは、様々な動きがありました。

「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」プロジェクトは、9月19日～21日にかけて横浜で開催された「G空間EXPO」に出展しました。この時の模様は、19日のNHKニュースでも取り上げられ、翌日はブースに立ち寄って下さる人も多かったとのこと。その他、プロジェクト内のミーティングを9月中に数回実施。いくつか私たちも参加し、残り1年間で研究開発成果をどう取りまとめるのか、成果の社会実装に向けて意見交換を行いました。

「犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発」プロジェクトでは、小学校の協力を得て、全学年でプロジェクトで作成したSEL学習プログラムを実施。同じプログラムでも、クラス毎に担任の先生の工夫が施され、クラスによって展開は様々。今回は、保護者の方々もお子さんと同じプログラムのミニ版を体験。照れながらも楽しそうに取り組まれていました。

「系統的な『防犯学習教材』研究開発・実践プロジェクト」では、地域の方々に協力を頂き、プロジェクトで作成のシステムを活用して、地域のリーダーの方が企画、研修会を開催しました。研修会終了後には、地域の方々から忌憚のない、貴重なご意見を頂きました。「社会実装」の難しさを改めて感じる機会となりました。今回のご意見をどう生かすことができるのか、プロジェクトの正念場です。

「演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築」、「計画的な防犯まちづくりの支援システムの構築」の両プロジェクトでは、打合せ会議が行われ、筆者がサイトビジットに行ってきた。

この頃、サイトビジットに行き感じられることは、当センターの独自性でもある「社会実装」の難しさです。単に研究開発に留まることなく、社会で活用される成果の創出を目指しています。活用をされる人の立場に立ち、どんなものが必要とされているのか、どうやったら使いやすくなるのかを調査、予測して取り組んでいます。

また、地域で活用して頂くためには、根拠がしっかりとしていなければなりません。そして、それらをどう伝え、知ってもらうのか。この難しい課題に各プロジェクト、それぞれ独自の仕掛けづくりを進めています。

「被害と加害を防ぐ家庭と少年のサポート・システムの構築」プロジェクトは、領域Webサイト掲載記事の取材に行ってきました。こちらの記事は、後日公開予定です。

領域でも、プロジェクトに負けず劣らず、様々な活動を行っています。

一部をご紹介します。

領域総括および領域アドバイザーにより、領域の運営に関わる事項について議論する場である領域会議。領域設立当初から、約1, 2か月に1回のペースで開催してきましたが、今月上旬の開催で25回目となりました。

25回目の会議では、10月に控えている領域合宿を前に、各プロジェクトの進捗状況や確認事項について多く時間を割き、議論しました。また、領域主催のシンポジウムをはじめ、プロジェクトの取り組みや成果を皆さんにお伝えするための企画などについて、検討事項は盛りだくさんでしたが、活発な議論が飛び交いました。

先の会議のところでも少し触れましたが、来月中旬に開催される平成22年度領域合宿の準備を進めています。一年に一度、全プロジェクトの関係者が集まる領域にとって貴重かつ大きなイベントの一つです。せっかく集まっていた皆さんに内容の濃い充実した時間を過ごしていただけるよう、最終調整中です。合宿の様子は、次号のメルマガで紹介する予定ですので、楽しみに。

2. 犯罪からの子どもの安全レポート

●第2回若手の会連続セミナー

「リスク心理学と犯罪からの子どもの安全」研究会

リスク心理学の基礎（講師：中谷内一也 同志社大学心理学部 教授）

に参加して

平成22年9月3日 社会技術研究開発センター（東京都千代田区）

執筆：畑倫子 日本大学文理学部 研究員 /

（株）プレイスメイキング研究所 特別研究員

（「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」プロジェクト）

最近、「子ども」と関連して「リスク」という言葉に触れる機会が増えたと感じていました。遊具の設計において語られる「ハザードとリスク」、子どもの健全な発達のための「リスクの必要性」、親による子どもの犯罪被害の「リスク認知」。

そして、私の子どもが通っている保育園でも、昨年新型インフルエンザの予防接種騒動時に「ワクチン接種に当たっては効果とリスクを考慮してください」という市からの通達が張り出されました。

こうしたことから、個人的にリスク概念やリスク心理学について学びたいと思っていたのですが、最初に手に取った本の数式の多さに圧倒され、挫折したままの状態で開催の研究会に参加してしまいました。しかし中谷内先生のご講演はそんな私にも、とても分かりやすく、休憩時に「何時間でも聞いていられる！」と言っていた参加者もいました。

「若手の会」主催の研究会でしたが、30名程度の出席者のうち、中谷内先生の理想の女性「音無響子*」さんを知っていた人も多かったように思いました。

*音無響子：1980年代に連載された漫画「めぞん一刻」のヒロイン

リスクは一般的に、ある行為に伴って、望ましくない結果となる「確率」とその望ましくない「結果の程度」と定義されるそうです。リスクを管理していくには、1つのリスクが他のリスクとトレードオフの関係にある場合もあるので、多角的に見る必要性があります。

しかし、子どもに関しては難しい問題だと感じました。例えば、予防接種時

の重篤な副反応のリスクを自分の子どもで受け入れないことで、他の人たちが感染するリスクを増やし、結果として社会全体のリスクを増やしてしまうかもしれません。

また、先生の著書にある例ですが、犯罪被害を恐れ、車などで送り迎えをする親が増えると、親が送迎できない子どもが犯罪や事故に遭うリスクが高まるかもしれません。

例のように、リスクAとBが同一人物におけるリスクではなく、自分の子どもと他人の子どもという場合、価値が個人にとって同等ではないため、親が社会的にメリットのある判断をするのは難しいのだと思いました。

それでも、リスクを管理するには、ゼロリスクは無理であることを社会が受け入れていないとできないこと、そして、一般の人のリスク認知を踏まえる必要性があることが分かりました。

ちなみに、先生の著書「ゼロリスク評価の心理学」の緑の表紙は、良く見るとしし唐で、これは、しし唐は、食すが稀に辛いものがあるということがリスクに似ていると、先生ご自身がデザインされたものだそうです。

では、一般的に人はリスクをどのようにとらえるかですが、客観的にリスクが高いと評価されたものについては、人々のリスクに対する認知も高くなって不安になり、逆に客観的なリスク評価が低いとリスク認知も低くなり、人々は安心だと感じられるそうです。

しかし、リスク評価は低いのに、一般の人のリスク認知が高くなることも多々あるそうです（例えば、原子力発電所）。

リスクを人がどう認知し判断や意思決定を行うかは文脈に依存していて、合理的ではないことが多いようです。例えば、1つのリスクに注目すると他のリスクに目が向かなくなる傾向が人にはあるそうです。

30代半ばで結婚した知り合いが「私は（高齢出産の）リスクが怖いから子どもは作らない」と宣言した時、出産後に怪我や病気で子どもがハンディをおうリスクもあるし、出産経験が少ないことでリスクが高まる女性の病気もあるし、そもそも20代でも出産にはリスクが伴うものなのでは？と違和感を持ったことを思い出しました。

でも、講演で例として挙げられていたダイオキシン母乳問題（1990年代後半から2000年代初めに大きく報道）を、当時学生で母親ではなかった私はほとんど覚えていませんでした。年齢や状況によって人々の「ホットな」リスクが違い、たとえ同じ「子育て中の親」でも、子どもの年齢によってリスクに関する感じ方や認知の仕方が異なるのだらうと思いました。

また、人のリスク認知は合理的ではないけれども、非合理的でもなく法則があるというお話は、精神物理学と似ていると思いました。「疾病により、誰も生き残れないとされていた時に、対策によって200人生き残れる可能性がある場合と、400人生き残れるとされていた時に対策によって600人生き残れるという場合では、生存者が200人増えるということでは価値は同じだけれども、感情的には同じではない」と聞き、学部時代に聞いた「両手が空の時にステーキをのせれば、どちらの手にのったか気付くが、両手に小錦がのってれば、どちらにステーキをのせたかは分からない」という精神物理学のたとえ話を思い出しました。

研究者や行政が子どものリスクに関して一般の親に伝える際は、合理的かどうかだけではなく、リスク認知のされ方や価値感情を考慮し、親が後悔しないと思える判断を下せるような情報提示の仕方を工夫する必要があると改めて感

しました。

最後に、客観的なリスクが高いと評価されているのに、人々のリスク認知が低い場合の例として、「鳥わさ」が紹介されました。実際には食中毒を発症する確率が高いのに、そのリスクは低く認知されていて、危険性に関する情報が与えられても、生肉を食べる人があまり減らないそうです。

このお話がとても印象的だったのか、講演終了後に、研究会の企画関係者たちは暗示にかかったように「焼き鳥屋」へ行きながら、何軒か満席で断られてやっと入れたお店でなんとなく「鳥わさ」を注文して食したのです。「集団の圧力」、「楽観バイアス」、「恐怖喚起の方法」…、リスク情報の提示の仕方は本当に難しいと体感しました（私は「傍観者」でした）。

3. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイト更新情報

【更新情報】

●国の取組み

犯罪死の見逃し防止に関する特別世論調査（内閣府）
<http://www8.cao.go.jp/survey/tokubetu/tindex-h22.html>

平成22年上半期の犯罪情勢（警察庁）
<http://www.npa.go.jp/newlyarrived/?seq=4702>

平成22年上半期のサイバー犯罪の検挙状況等について（警察庁）
<http://www.npa.go.jp/newlyarrived/?seq=2865>

少年矯正を考える有識者会議 第10回議事概要掲載（法務省）
<http://www.moj.go.jp/shingi1/shingi06400003.html>

再犯防止施策の今後の展開について（中間取りまとめ）（法務省）
http://www.moj.go.jp/hisho/seisakuhyouka/hisho04_00004.html

法制審議会児童虐待防止関連親権制度部会第6回会議議事録（法務省）
<http://www.moj.go.jp/shingi1/shingi04900033.html>

第3回死因究明に資する死亡時画像診断の活用に関する検討会議事録
（厚生労働省）
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000000qxsh.html>

その他の取組みについてはこちら
→ <http://www.anzen-kodomo.jp/ministries/>

●イベント情報

平成22年10月1日～日本犯罪社会学会大会第37回大会（東京都）
「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」
プロジェクトの実施者が研究発表を行います。
テーマセッションC 「犯罪からの子どもの安全」
日時：10月2日（土） 13:50～16:50
場所：国土舘大学 世田谷キャンパス34号館3階3番教室
<http://hansha.daishodai.ac.jp/meeting/index.html>

平成22年10月2日～第7回子ども学会議学術集会
子どもサポートの統一危機にある子どもたちー（埼玉県）
<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/act/index.html>

その他のイベントについてはこちら
→ <http://www.anzen-kodomo.jp/event/>



【見どころピックアップ!】

今回の見どころはトピックスから、近日公開予定のプロジェクト関係者インタビューです。

今回インタビューに応じていただいたのは、「子どものネット遊び場の危険回避、予防システムの開発」プロジェクトと協働している、ぐんま子どもセーフネット活動委員会でボランティアとして子どものネット問題に取り組む市民インストラクターの方々です。

市民インストラクターの皆さんは、子どもたちの携帯電話やインターネット利用に関するさまざまな問題による被害を減らすため、保護者や子どもたちに現状を広く伝えるとともに、啓発活動なども行っています。

ー市民だからこそ、子どもを持つ親だからこそ、分かること、伝えられることがある、そんな皆さんの思いが凝縮された記事に仕上がっています。10月上旬には掲載される予定ですので、ぜひご期待ください。

トピックス → <http://www.anzen-kodomo.jp/column/>

4. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイトアクセスランキング

【アクセスランキング】

- ☆ 1位 平成21年度研究開発実施報告書
「子どもの見守りによる安全な地域社会の構築 ハート・ルネサンス」
http://anzen-kodomo.jp/reporters/reports/pdf/report2009_ikezaki.pdf
- 2位 平成19年度採択プロジェクト企画調査終了報告書
「幼稚園・保育所等における幼児の安全管理手法確立のための研究開発」
http://anzen-kodomo.jp/reporters/pdf/H19_watanabe_houkokusyo.pdf
- 3位 イベント情報
<http://www.anzen-kodomo.jp/event/>

5. 今月のキーワード

「23,983件」

今年上半期にインターネット・ホットラインセンターが受理した情報のうち
ページ(6)

違法・有害情報に該当すると判断された件数です。前年同期を約70%上回ったとのこと。

ちなみに、センターが受理した通報件数の総数は、78,130件なので、約3割が違法・有害情報ということになります。中でも、わいせつ物、児童ポルノに関する情報等の違法情報については、18,542件（前年同期比+75.4%）と深刻な様相。

寄せられた情報を基に、センターではサイト管理者に削除要請等の処置も行っているようですが、違法情報や有害情報が掲載されたサイトのうち約半数がサイト内にメールアドレス等の連絡先を掲載しておらず連絡先が不明であるなど、課題はまだあります。

警察庁広報資料：平成22年上半期の「インターネット・ホットラインセンター」の運用状況について

<http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h22/pdf03-1.pdf>

「犯罪からの子どもの安全メールマガジン」

▼メールマガジンに関する各種変更、配信登録・解除はこちら

<http://www.jst.go.jp/melmaga.html>

▼ご意見・ご感想、お問い合わせはこちら

c-info@anzen-kodomo.jp

■発行日 2010年9月30日

■発行元

（独）科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域

領域WEBサイト <http://www.anzen-kodomo.jp/>

社会技術研究開発センターWEBサイト <http://www.ristex.jp/>
